平田研究室－ 建築が顔でみちるとき —

HIRATA Laboratory – Architecture full of people –

博士後期課程 1 回生　大須賀　嵩幸

「人間の社会では、顔が君臨する。身体は奴隷で、二重三重に布でくるまれ、包み隠される。その役割は、騾馬のように、蠟のように黄ばんだ聖遺物を上に載せて運ぶことだ。」[1]（ジャン・ポール・サルトル「顔」）

1）ジャン・ポール・サルトル（石崎晴己訳）：「顔」，『実存主義とは何か』，人文書院，1955，p.125.

魔術的な顔

プロジェクトのページをお借りして、エッセイのようなものを書くことになった。私などお呼びでないのだろうけれど、個人の目を通すことで浮かび上がる平田研の側面もあるかもしれないと信じて、最後まで書いてみようと思う。

今号のテーマは「顔」ということだが、たまたま出会ったサルトルの短編がまさに「顔」だった[2]。彼に言わせれば身体は顔を運ぶ奴隷である。確かに顔は身体の上のほうの一端であり、一つの事物でもあるが、決して事物と同じではない。その目差しによって将来を捉えるという超越の現れが顔であり、それは魔術的である。

2）昨年の traverse のテーマは「壁」だったが、サルトルの作品では「顔」よりも「壁」の方が有名だろう。

こむずかしい話は抜きにしても、顔が他の身体とは一線を画することは私でも理解できた。ギニアのある民族は頭の上に屋根を載せて引越しをするという。人の営みと建築が融合したかのような現象に驚く一方で、その光景にはどこか違和感を覚えてしまう。顔は運ばれる側であり、上にものを載せて運ぶものではないのだ。

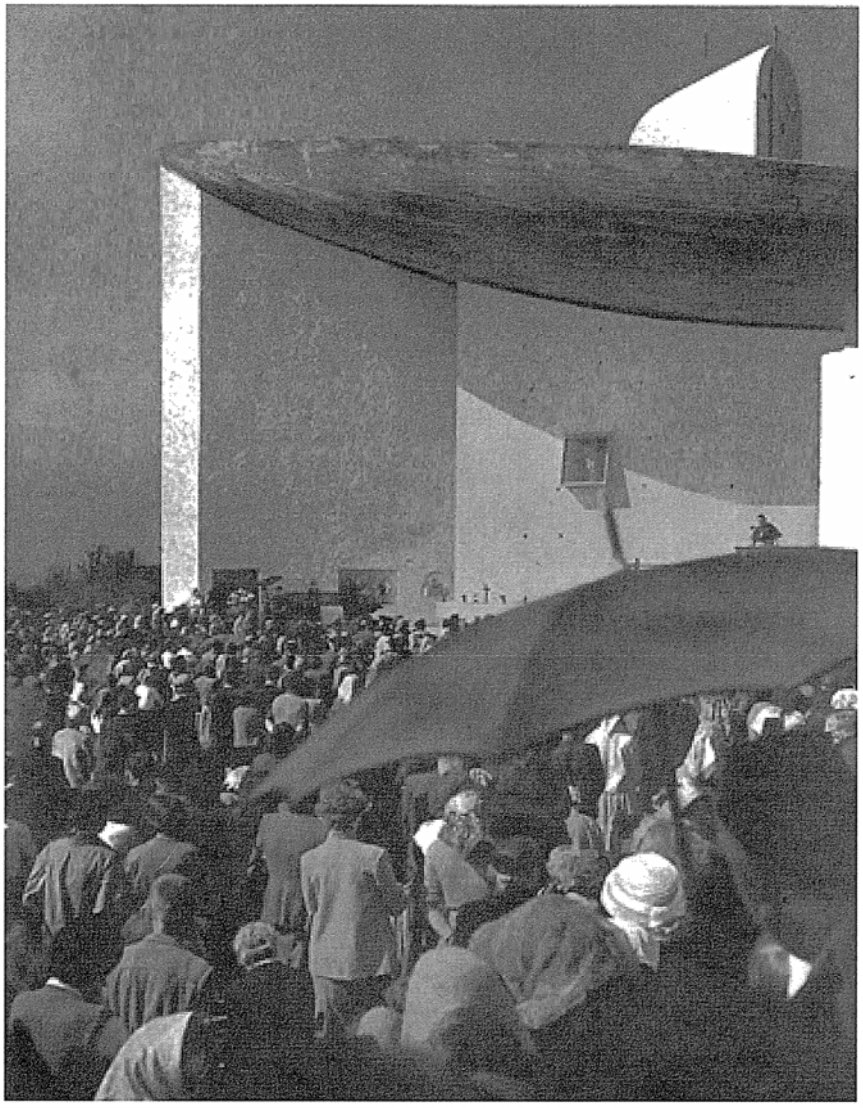
ギニアの引越し風景
バーナード・ルドフスキー（渡辺武信訳）：「建築家なしの建築」，鹿島出版会，1984.

そんな魔術的な力を持った顔が一箇所に多く集まった光景は、何か異様な力を感じさせる。平田晃久先生の講義で、ロンシャンの教会に町中の人が群がる写真を見せてくれたことがある。その講義は「ここにしかない建築」というテーマで、場所と強く結びついた建築を紹介するものだった。町中の人々が一堂に会すこの光景を理解するには、ロンシャンのまちの性質と、それと結びついた教会のあり様から語る必要がある。

教会の内部空間は暗く、洞窟のようである。壁には彫りの深い開口が穿たれて、光が差し込む。ここまでは、大多数の建築学生は知っていることと思う。印象的だったのが、ロンシャンは炭鉱が盛んな町であり、暗い洞窟の中で光を求めて進んでいく体験が、工夫たちに親しみを覚えさせたという話だ。

外に開かれた教会の使われ方も特徴的である。日常の少人数での礼拝は屋内で行われたが、大きな巡礼があるときは屋外の広場が使われた[3]。教会での祈りというものに縁遠かった鉱夫たちにとって、このような開かれた場での礼拝はかえって受け入れやすいものであった。特徴的な造形で知られるコルビジェの名作は、ロンシャンという場所とそこに暮らす人びとと切っても切れない関係にあったのだ。

3）吉阪隆正：「建築における真行草」，『GA グローバル・アーキテクチュア No.7〈ル・コルビュジェ〉ロンシャンの礼拝堂 1950-54，A.D.A. EDITA Tokyo，1971.



ロンシャンの教会　巡礼の日
"Le Corbusier: OEuvre complete 1952-1957", Basel : Birkhäuser , 1957.

ゴシックとパサージュ

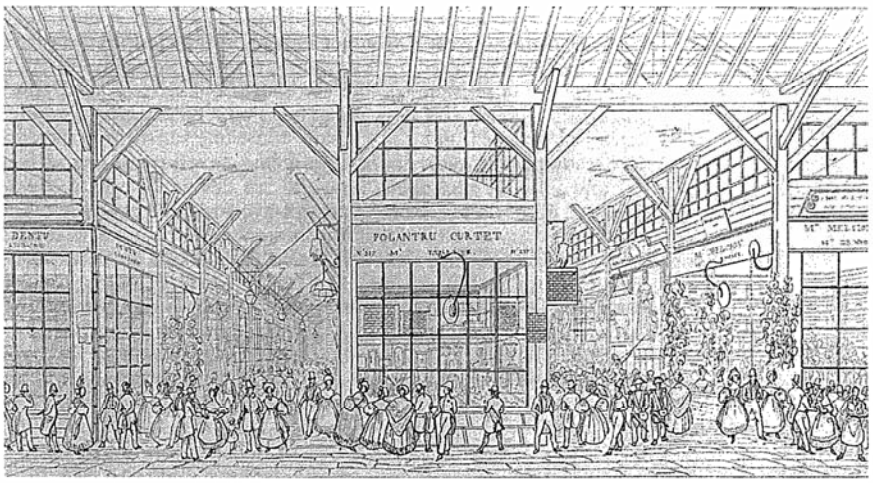
どうやら私は、多くの人が集まっている光景に魅力を感じるようだ。ターミナル駅やショッピングモール、スポーツ観戦やロックフェスに出掛ければ人がいっぱいいて楽しいのだが、それらの場所ではあまり建築の気配を感じることができない。圧倒的なコンテンツを前に、建築は背景にしかなり得ず、時には退けられてしまう。だからこそ、「ここにしかない建築」に人々が集まることに魅力を感じるのだろう。

人びとで一杯にみちた建築は、その社会や人びとと切っても切れない関係にあるのだから、人びとの潜在的な性質を反映したものになっているはずだ。この時建築は何かしらの目的のために建てられるというよりも、地面から生えてくるように建ちあがると言った方がいいだろう。人類の歴史を振り返ると、時代の転換点とも言えるような節目節目で、まるで人びとの感情が爆発するかのように、ある期間に集中的に建てられてきた建築があることに気づく。そうした建築は時代の人びとが最も集う場所であった。そんな稀有な建築の例としてゴシックの大聖堂とパリのパサージュのことを考えてみた。

ゴシックの大聖堂は巨大な内部空間・圧倒的な昇高性・過剰なまでの装飾といった異常さが目立つ建築様式であるが、そんな建築が次々とつくられた「教会堂建築熱」もまた異常なものであった。1050年から1350年までの300年間において、フランスでは80の大聖堂と500の教会堂、数万の教区教会堂が建てられ、数百万トンの石材が切り出された。石材の量で言えばこれはピラミッドを建設したエジプトのどの時代をも上回る[4)]。大祭日の時には1つの都市に1つしかない大聖堂に全ての都市民が押し寄せるから、大聖堂は都市の全人口を収容する必要があった。アミアン大聖堂は1万人、シャルトル大聖堂は5000人の全市民の他に近隣局の農民までもを収容した[5)]。現代の都市に全都市民を収容できるスタジアムがあるはずもないから、われわれが中世の大祭日の光景を想像することは困難である。

ゴシック建築のそびえ立つような内部空間を、北フランスの深い森の見立てとする説がある[6)]。中世の農業革命によって大幅な人口移動が起こり、農村から都市に移住した新都市民にとって、生まれ故郷を思わせる空間は心の拠り所となっただろう。また、ステンドグラスを通して降り注ぐ光は、神の光であり、それを通じて誰もが天上へ近づけるという教えが説かれた[7)]。これによってあらゆる身分の人が神に近づくために大聖堂に集ったのである。ゴシックの大聖堂が多くの人びとが集う場であったことと、その建築的特徴は密接に関係している。

19世紀におけるパリのパサージュの流行もまた、凄まじいものであった。1822年から1848年だけで、46ものパサージュがパリに建設された[8)]。そんなパサージュの始まりは、パレ=ロワイヤルにつくられた木の回廊ギャルリ・ド・ボワ（1786年）に見ることができる。この回廊は商業的に大成功したのだが、一方で娼婦や革命を目論む人びとのたまり場になり、バスティーユ襲撃の群衆もここから出発した[9)]。当時のパサージュの空間は、人びとを革命に向かわせるような気分にさせたのだろう。



ギャルリ・ド・ボワ
Pierre François Léonrad Fontaine, "Journal, 1799-1853",
Paris : École nationale supérieure des beaux-arts ; Institut français d'architecture, 1987.

4）ジャン・ジェンペル（飯田喜四郎訳）：「カテドラルを建てた人びと」，鹿島出版会，1969，p.9.

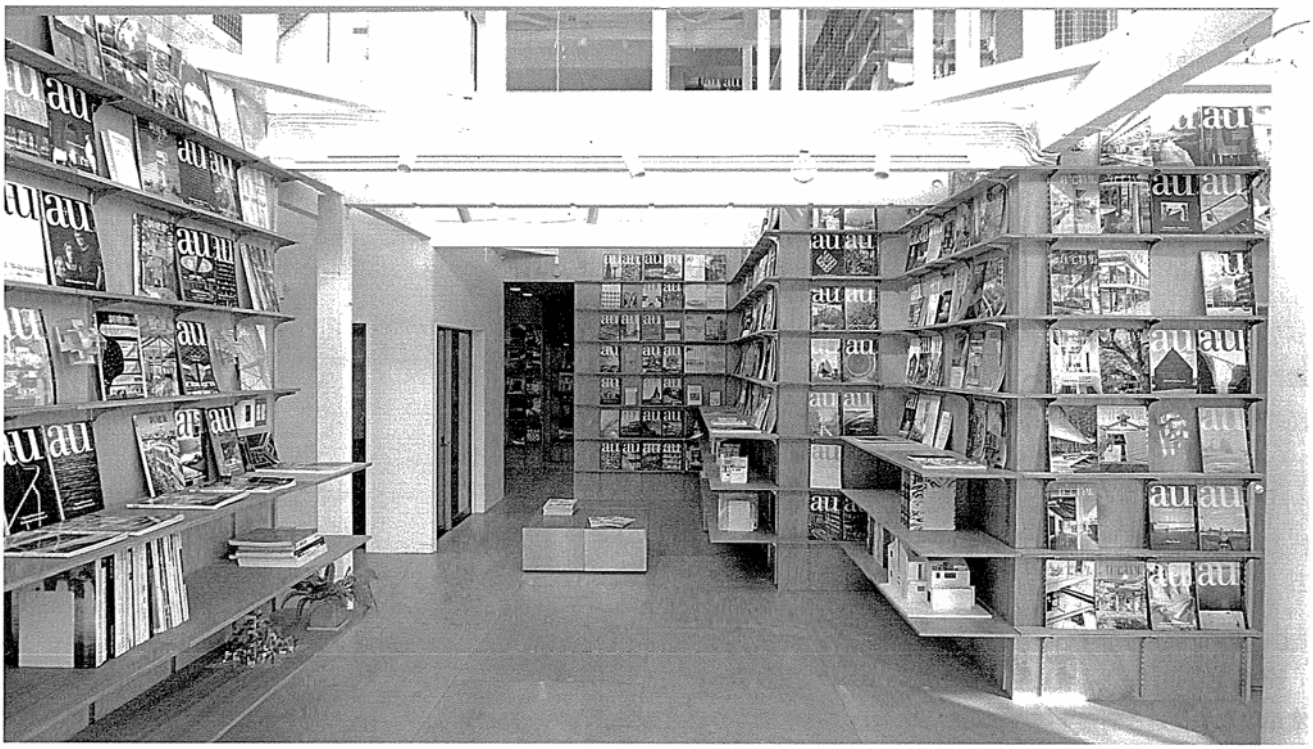
5）ジャン・ジェンペル（飯田喜四郎訳）：「カテドラルを建てた人びと」，鹿島出版会，1969，p.10.

6）酒井健：「ゴシックとは何か 大聖堂の精神史」，講談社，2000，筑摩書房，2006，pp.46-48.

7）酒井健：「ゴシックとは何か 大聖堂の精神史」，講談社，2000，筑摩書房，2006，p.99.
サン・ドニのシュジェールは偽ディオニュシオスの光の神学を参照した。

8）アルフレッド・フィエロ（鹿島茂ほか訳）：「パリ歴史事典（普及版）」，白水社，2011.

9）ゆえにパサージュは群衆を生んだ建築ともされている。人びとは革命により個人を獲得していき、資本主義が台頭していった。それはパサージュ建設の大きな要因に違いないが、結局大多数の人びとはパサージュで群衆になったというのはどこか逆説的な話である。



北大路ハウス・母屋（撮影：平田研究室）

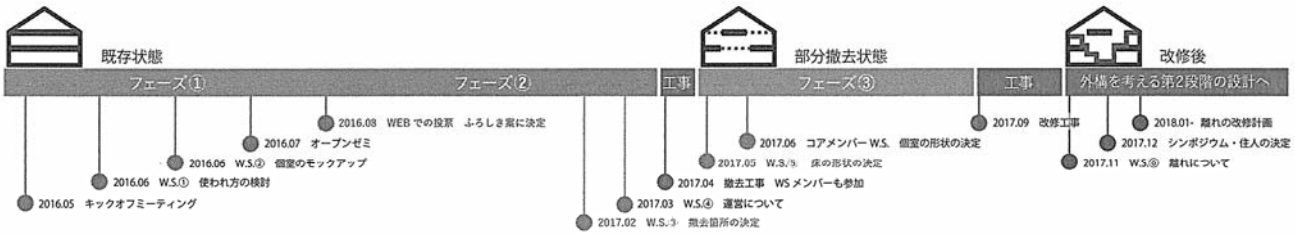
北大路ハウス・母屋

祝祭や革命といった、人間の集合的な出来事や時代の気分が表れているような建築に人びとは集ってきた。規模は違えど、平田研究室で取り組んでいる「北大路プロジェクト」でも、そういう場所をつくっていきたいと思っている。

traverse17 でも紹介した「北大路プロジェクト」とは、京都市北区の木造住宅を改修して建築学生が住むシェアハウスとし、さらに学生が自由に使える多目的な公共スペースを一体的に整備するものである。株式会社新建築社の依頼により、平田研究室と平田先生を中心として設計活動に取り組み、メインとなる母屋「北大路ハウス」が 2017 年 11 月に竣工した。現在私を含めた 6 名の学生が入居している。

京都には建築を学ぶことのできる大学が 11 校ある。学校の枠を超えた学生活動としては、例えば京都建築学生之会による合同卒業設計展「Diploma × KYOTO」がある。30 年続くこの展覧会は出展者がそのまま運営を兼ねるという特異な体制で、毎年独自の色を打ち出してきた。一方で主体が毎回総入れ替えになることで生じる断絶性や、昨今の卒業設計展ブームを疑問視する声の中で、参加している学生たちはさまざまな思いを抱えているようだ。京都に来て建築を学ぶこと 7 年、学校の枠を越えて学生たちが集まる場としての建築が求められているように思った。それは中世の都市民がゴシックの大聖堂によって結びついたことや、近代の民衆がパサージュで革命の狼煙を上げたことと、どこか通ずる気がするのだ。

北大路ハウスを学生であふれるような場所にするためには、学生たちの思いや性質をとらえて空間に昇華する必要があるだろう。また、出来上がった建物を実際に学生たちに使ってもらうためには、積極的に関わってくれそうなメンバー集めも欠かせない。そこで私たちは、実際に住み手、使い手になる学生たちをワークショップに巻きこんで設計に取り組むことにした。ワークショップ初心者のわれわれはその都度手探りで挑んだため、毎回目に見える成果をあげることは必ずしもできなか

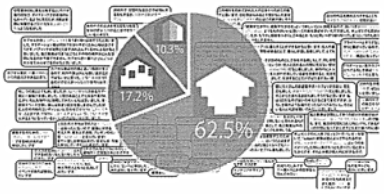


北大路プロジェクトのスケジュール

った。しかし、いくつかのワークショップにおける決定事項は施主の確認を経て、最終的な設計案に反映されることとなった。これらの各決定を振り返ることで、集団的な設計行為の観点からプロジェクトを概観してみたい。

一つの案へ絞り込む：多数決と死票

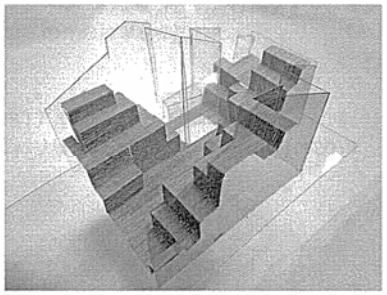
設計の初期段階では研究室のスタディといくつかのワークショップを経て３つの案が提示された。個室を「カプセル」に見立てた案や、公私の領域が「グラデーション」をなす案を抑えて、木の面を「ふろしき」のように広げた案が支持を得たため、この案を採用することにした。



３つの案に対する投票とコメント

案を決めるに際して何度か投票を行った。０票だった案は鍛えあげて次回リベンジに臨ませる。突拍子のない案が人気を博するとスタディにつきまとう不安が払拭される。多数決で決めるわけではないが、それぞれの学生が何を考えているかを知るためにも投票というツールは有効であった。

それでもいつかは１つの案を選ばなければいけない。多数決の問題点の１つは、選ばれなかった案に寄せられた意見が吸い上げられないことである。実はここで選ばれた「ふろしき案」は、その後スタディを進める中で他の２案の要素を取り込みながら最終案になった。

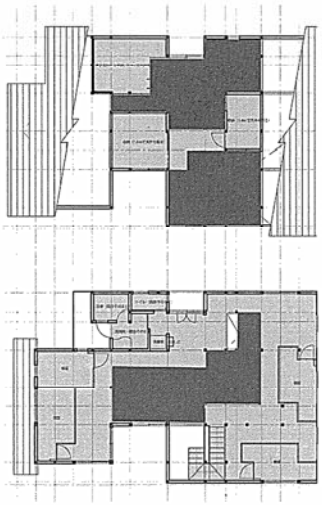


ふろしき案のコンセプト模型

私は自覚的ではなかったのだが、平田先生や他の学生たちは他の２案を取り込めるポテンシャルを持った「ふろしき案」のポテンシャルに気づいていたのかもしれない。そうした予定調和のような見方もある一方で、選ばれなかった案に寄せられた意見が私たちの中に残っていて、それがスタディの方向性に知らず知らずのうちに影響を与えていたという仮説も提示できるだろう。そう考えると、一つの案を浮かび上がらせるために建築家が果たす役割が少しわかったような気がした。

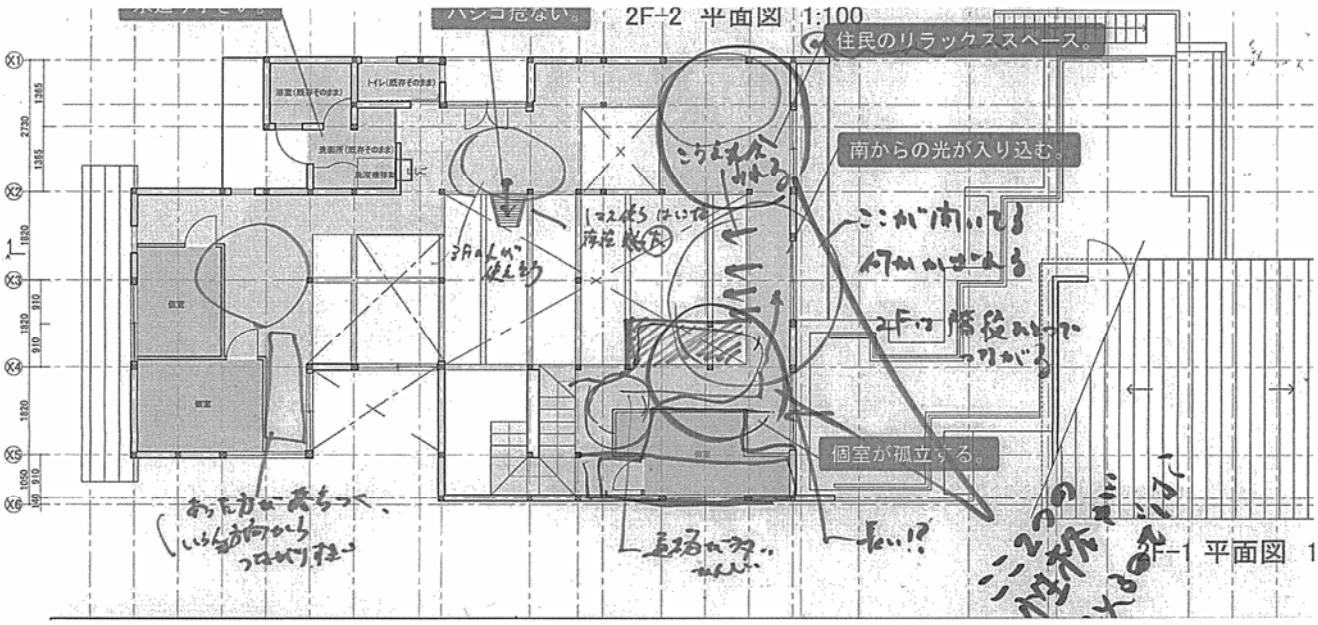
撤去してから考える：最大公約数と不可逆性

「ふろしき案」で基本設計を進めていくうちに、既存木造住宅の改修を行うに際して、ある程度まで床面積を減らす必要があることが分かった。そこで、改修工事に先駆けて撤去工事を行い、撤去後の状態を見ながら最終的なプランを決めることが提案された。



決定された撤去箇所

当たり前のことだが、一度撤去してしまった壁や床は元に戻せない。こうした遡ることのできないプロセスをあえて取り込むことで、ワークショップで決めた撤去箇所が、最終的な建築にもそのまま撤去跡として現れることになる。ゆえにこのプ



ワークショップで用いられた図面

ロセスは慎重に進められ、いくつかある撤去パターンのいずれにも対応できるような形で撤去が決められた。

それぞれの意見にすべて応えるような最大公約数な意思決定のしかたは、あまりよいものではないだろう。ただ今回は、撤去後の状態を見ながら再度議論できる可能性があったため、誰も置き去りにしないための最大公約数を選んだ。多くの人に意見を出してもらっている中で、それに対して真摯に向き合う姿勢がなければ人は離れていってしまう。集団で設計することの難しさはそうしたところにある。

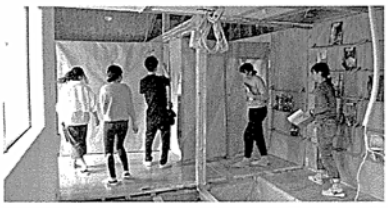
集団の場で案が生まれる：思考のツールと集合知

撤去工事ののち、最終的なプランを決めるワークショップが開かれた。撤去後の既存建築にクラフト紙をアタッチして、原寸大のモックアップをつくり、実際の空間を体験できるようにした。その甲斐あってか、のちの議論が活発なものとなり、ついには研究室で用意したものとは異なる案がワークショップ中に生まれ、その案をベースに決定がなされた。

このプロジェクトの大きな特徴は、参加する建築学生が図面や模型から空間を考える能力を持っている点だ。だから私たちは、ワークショップの中で研究室が用意した案がひっくり返されてしまうようなことを期待していた。とはいえ、学生ごとに能力の差はもちろんあるし、限られた時間の中での思考には限界もあり、なかなか予想外の出来事は起こらなかった。

ワークショップを開く私たちの能力不足もあったと思う。今回は和室や階段といった部分ごとのありうるパターンを整理して、それぞれの利点と欠点を提示するようにした。

これまでの議論の集積、撤去状態のモックアップの活用、ありうる選択肢の整理など、様々な要因があってはじめて、みんなで新しい案を生み出すことができた。今はまだこうしたアナログで場当たり的な取り組みにすぎないものが、近い将来、集団での思考を容易に可能にするようなツールに置き換わったとしたら。より多く



撤去状態を活用したモックアップ
（撮影　平田研究室）

母屋完成後に行われたワークショップ
（撮影：平田研究室）

の人を巻き込んだ建築の設計が可能になるかもしれない。それはビッグデータや集合知といった現代の関心事に、建築が接続するひとつの回路を示している。

他者性と建築家

ところで、みんなでつくった建築は果たしてよいものになるといえるだろうか。「他者」の思考を取り込むことの意義はどこにあるのだろうか。

そもそも建築家にとって「他者」はそれほど新しいテーマではないはずだ。設計教育における先生と学生のエスキスや、外部化された思考としての模型を見ながら考えるスタディ方法も、広い意味では「他者」との対話による設計行為といえる。であるならば、より多くの他者性を取り入れることで、よりよい建築を設計できるのではないかという仮説はあってもよい。

個としての建築家は、集団の中でいったんは弱められるかもしれない。けれども、ある生物が他の種に負けないように進化してきた生存競争のように、集団の中でより輝きを増す個性もあるだろう。さらに言えば、多様きわまりない「他者」の集合に建築としての全体性を与えられるかどうかに、個としての建築家の矜持が問われるのではないだろうか。

「顔（＝人）」でみちた建築の光景から集団的設計行為の話まで飛んできてしまった。改めて考えると、「顔」とはきわめて他者性をはらんだテーマではないか。ワークショップをしていると、模型に寄せられるコメントや議論の中での周囲の発言によって、自分が何を考えているのかがどんどん言語化されていく。自分がどんな人間なのかわかるのは、「他者」を通したときだけだ。その感覚を言い表すようなサルトルの言葉を最後に引いて、筆を置きたい。

「私が私の顔を知るのは、むしろ反対に他人の顔によってである。」